

2022- March
No.123

桜建会報

OKEN

contents

創立100周年記念座談会

特集◎一世紀を超えて、これからを展望する—— 2

その2 ●工学部建築学科

倉田光春 × 若井正一 × 浦部智義 × 齋藤俊克 × 山田義文 × 濱田幸雄

斎藤賞・加藤賞・桜建賞 2021年度受賞者一覧 —— 11

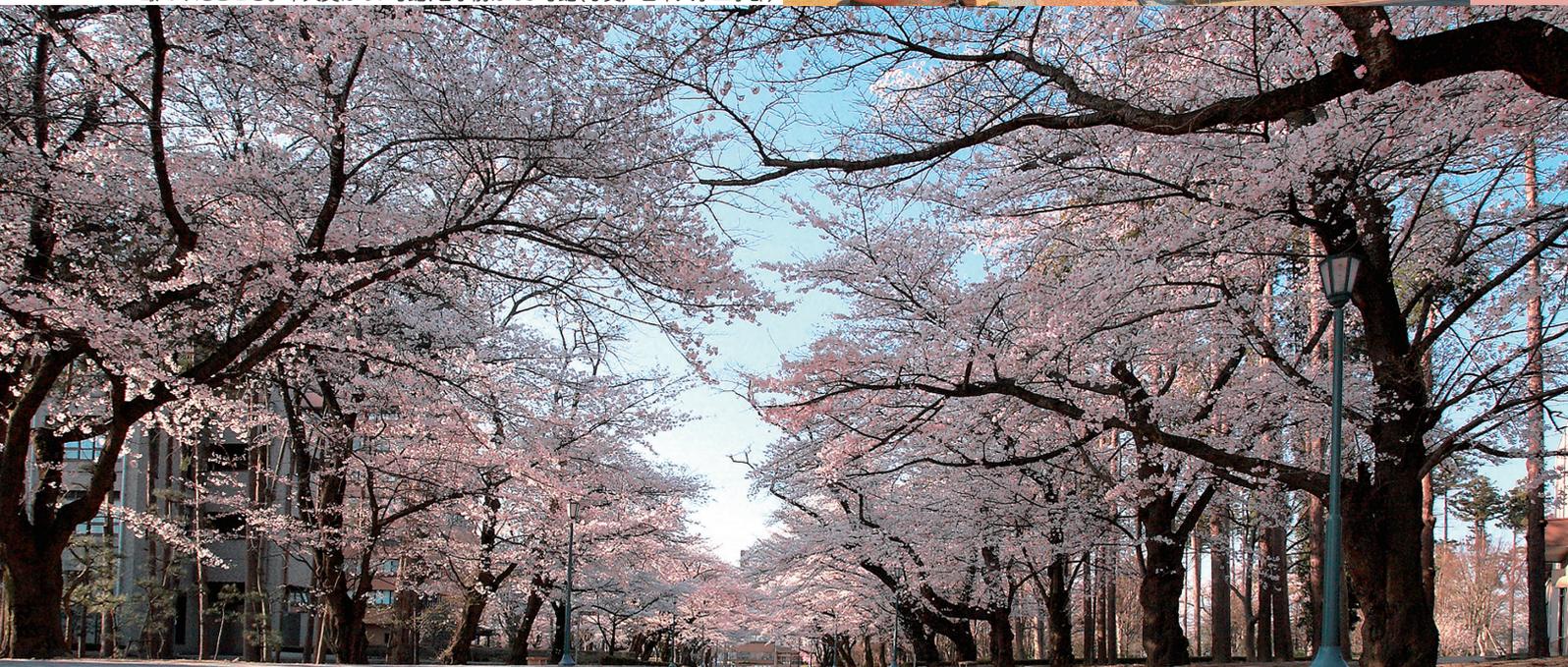
オール日大建築系 2021年度授与賞・受賞者一覧 —— 13

事務局だより —— 15

学部ニュース —— 15



下/正門から本館を抜ける桜並木が美しい郡山キャンパス。右/本館から鳥瞰してみたところ。中央奥は61号館、右手前は55号館(写真/日本大学工学部)



創立100周年記念座談会 特集◎ 一世紀を超えて、これからを展望する

その2 ●工学部建築学科

地方の理工系大学として、地域とともに生きていく

兵舎・高度成長・被災から支援へ



2022年1月27日、工学部郡山キャンパス 16号館の大学院講義室にて。
画面右上の若井先生、高橋岳志先生(広報委員)はリモート参加。

出席者／ 倉田光春(元教授・建築構造)
若井正一(元教授・建築計画)
浦部智義(教授・建築計画)
齋藤俊克(准教授・建築材料)
山田義文(専任講師・建築計画)
司会・濱田幸雄(教授・建築環境)

[工学部の始まり]



Hamada Yukio
1960年長野県生まれ。83年明治大学工学部建築学科卒業。88年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(建築学専攻)。88年大成建設(株)技術本部技術研究所音響心理室研究員。95年より日本大学工学部建築学科。工学博士。専門は建築音響工学。著書に『音響キーワードブック』(日本音響学会編コロナ社)、『集合住宅の遮音性能・遮音設計の考え方』(日本建築学会編丸善出版)。現在、日本大学工学部建築学科教授。

濱田／今日は昔の工学部のことをよくご存知の倉田光春先生、若井正一先生と、現役の教員として浦部智義先生、齋藤俊克先生、山田義文先生に来ていただき、今までのことと、今後について、話をしていきたいと思います。まずは、倉田先生と若井先生にお聞きします。特に倉田先生はお父さまの倉田博先生が工学部の教授で、寮の舎監を務めていたので、このキャンパスで育ったと言ってもいいんですよね。理工学部の大学院から工学部に戻って来られた印象はどうでしたか。

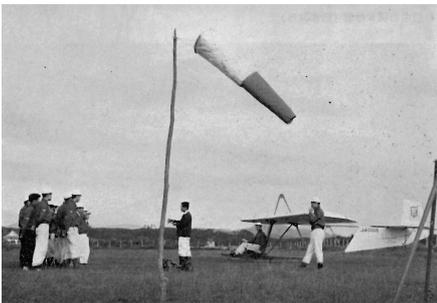
倉田／こちらへ帰って来られるというのは、うれしかったし、やりがいもありました。着任したころの郡山の学生は元気があつて、おもしろかった。それに都会のエライ先生はなかなかコミュニケーションもとりにくくって、そういう意味では、工学部の先生方は親

しみやすかったし、地方のよさがあつたように思えます。その中でいちばん印象に残つたのは、サークル活動です。ほんとに盛んでした。ボート部やヨット部、滑空研究会など、とても楽しい大学だった。濱田／そのころどのような教育をしたと考えていましたか。

倉田／こちらへ来たら、学生と一緒に楽しむという気分でした。教育しようなんて、おこがましいと。一緒に学ぶという姿勢ですかね。

濱田／今とはかなり違いますね。ありがとうございます。若井先生はどうでしたか。

若井／私が着任した時期は全国的な大学紛争がようやく収束して間もない昭和44年4月でした。着任してから50年余り経ちましたが、創立100周年の桜建会に比べれば、ちょうど半分ですね。社会背景は、翌年に大阪万博があつ



上／敗戦から間もないキャンパスには、まだ兵舎が残っている。大学の北東方向を見たところ。1947（昭和27）年ころ（出典／『日本大学工学部三十年史』）
 中／1960（昭和35）年ころの学生寮「北心寮」（出典／『日本大学工学部三十年史』）
 下／サークル活動のひとつ、滑空研究会の活動の様子。1957年ころ（出典／『日本大学工学部三十年史』）



Kurata Mitsuharu
 1946年福島県生まれ。69年日本大学工学部建築学科卒業。77年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修了。79年より日本大学工学部建築学科。工学博士。専門は建築構造。2006年日本建築学会東北支部支部長。14年退官。

て、高度成長期のころです。教員ではいちばん年下で、その時の建築学科の主任は、倉田先生のお父さんの倉田博先生でした。倉田博先生は音楽が大好きで、毎日早朝、7時半くらいに研究室のステレオでクラシックをかけていたのを覚えています。私は計画の佐藤平先生の研究室で、最初の弟子というか、私を建築に誘った張本人です。学科長の倉田博先生との思い出は山ほどあります。先生から朝、本日やることを指示されるのです。すぐに動こうとすると、「よく考えてから行動してください」と言われました。このことばは、郡山に来て初めて肝に銘じた教えでした。倉田博先生が定年間近に執筆された『創建』（建築学科の教室報）の巻頭文にいいこと書いているんですよ。倉田博先生は工学部の寮の舎監をやっていた、学部の生き字引のような人でした。郡山はさきほど倉田光春先生が言っていたように、先生と学生の距離が近くて、家族のような感じで研究室に入ってくる。設計希望の卒研生には、「コンペをやりませんか」とよく声をかけました。倉田先生は小さいころからのキャンパスにいましたよね。どうでしたか。

倉田／校舎の元は海軍の木造兵舎だったんですよ。跡地に鉄筋コンクリート造の建物が建てられ、東西に並んでいるという感じです。木造の校舎は今ではないんですが、そういう古い建物は、70年の万博以降、次々と壊されていきました。兵舎だった時のことは知

りませんが、壊す時は若干寂しかったですね。学生寮だった「北心寮」もなくなりましたね。

若井／私が着任した時期は、鉄筋コンクリート造の校舎が主流でした。

倉田／今の寮は3代目ですね。最初はキャンパスの中に木造の建物があちこちにあった。それで、広い空地があったので、滑空研究会などもあって、キャンパスの空を飛ぶような時期もありました。濱田先生が来たころもまだあったんじゃないですか。

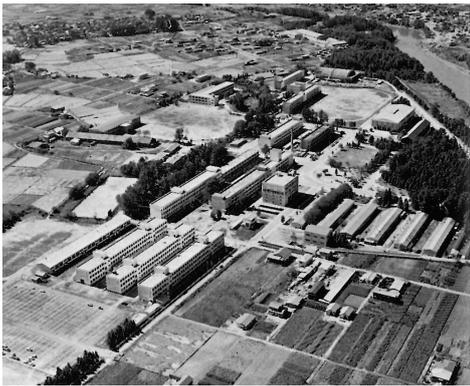
濱田／そういえば、学園祭の時にグライダーが展示してあったのを覚えています。

倉田／若井先生が言うように、キャンパスは木造の時代があって、鉄筋コンクリート時代があって、今は近代的な建物が建っている。われわれは鉄筋コンクリート造の建物ができたころに入った。

若井／そうですね。今は、建築学科の女子学生が多くなりましたが、当時は学年で数人程度でした。新幹線で郡山に来ると、車窓から立派な建物群が見えますけど、当時と比べたら隔世の感があります。

倉田／私が学生だったころの先輩方はみんな大人でしたね。気質とか、本質は変わらないと思いますが、私が勤務していたころの学生は、新しい世代の人たちで、学園紛争の世代より、大人しくなったように感じました。でも、みんな明るく元気に、青春を楽しんでいて、ちょっと羨ましかったですね。今は、さらに進んで、新人類ですよ。

工学部のマス教育と 広大なキャンパス



1971(昭和46)年ころのキャンパスの空撮。事務棟や鉄筋コンクリート造の校舎が整備されているのがわかる。右上には阿武隈川が見える(出典/『日本大学工学部三十年史』)



Wakai Shoichi

1946年新潟県生まれ。日本大学理工学部建築学科卒業、同大学院工学研究科建築学専攻修了(1975)、東京大学大学院より博士(工学)授与(1995)、東京藝術大学大学院美術研究科(デザイン専攻)研究生(2015-16)、近著に「一生使えるサイズ事典 住宅のリアル寸法 完全版」エクスナレッジ社(共著2022)など、専門は建築人間工学、日本大学名誉教授。14年退官。

濱田/私が着任したのは1995年です。ご指導いただいた荒井昌昭先生は冷暖房装置不要、研究は紙と鉛筆だけという驚くほど省エネの先生でした。印象に残っているのは5年後の2000年に工学部で開催した日本建築学会の大会です。県庁、市役所、地元企業、そしてなにより、学生との共同作業の楽しさを実感しました。浦部先生と山田先生も、他大学から着任されました。こちらに来て、印象に残ったことはどんなことですか。

浦部/着任したのは17年くらい前です。外部から、こちらの大学に来て感じるのは、まず学生数の多さです。最近慣れてきましたが(笑)。演習で受けもつ人数の多さは、出身大学の倍くらいの多さです。ですので、当初授業ではあまり、学生と遊ぶというか、じゃれ合うようなことはできなくて、漏れなく進めることを意識させられました。一方で、先ほど倉田先生がおっしゃっていた家族大学という印象もありますね。最初の1年間倉田先生の研究室にお世話になったんですけど、当時の倉田研究室には、野内英治先生(現職)もいらして、また、大学院生も多くって、そんなに大きくない部屋に、20人くらいいたでしょうか。研究室に入ると学生との距離がめちゃくちゃ近く感じたんですね。教員の部屋と学生の部屋が分かれてなかったんですよ。一緒に生活していくような、そういった環境がいいコミュニケーションを生んだ一因だと思います。

濱田/この中でもっとも遅く着任した山田先生の印象はどうですか。

山田/着任して4年になります。が、学生時代からずっと東京で過

ごしてきました。地方といっても、郡山は東京からのアクセスがよくて、キャンパスが広大で、ゆとりのある環境設備が整っているという印象です。また、キャンパス内には、いたるところにフリースペースがあります。コロナ感染症が拡大して、授業はオンライン形式も活用していますが、学生はそのフリースペースに来て、協力しながら学修しているのをよく見かけます。そんな姿に励まされたりもします。学生の出身地も東北だけではなく、北は北海道から南は沖縄まで、そして海外からと、いろいろなところから来ています。学生は多いんですけど、一人ひとりが近い感じですね。こちらは本当に自然が豊かで、四季の移ろいが美しく、春の桜の季節を毎年楽しみにしています。

濱田/建築教育の特色についてはいかがでしょうか。日大は、やはり構造の日大という自負があったと思いますが、倉田先生、いかがでしょうか。

倉田/昔の構造計算は、みんな手計算でやっていたんです。時代が変わってコンピュータが出始めたころは、今みたいにオールマイティにコンピュータが使えるかといったら、使えない。でも将来的には絶対必要になるので、どうしたら使えるようにできるのかを考えて、プログラミングを学生に徹底的に教えたんですね。「とにかく君たちは将来使えなくてはならない」と。それで、たくさん演習して、たくさん計算して、たくさん数値を見させて、慣れさせていった。理屈は後からついてくる。たくさんやった経験を活かして、数値を見たらなんとなくわかる、

というまでやらせた。学生は知らぬ間にたくさんやらされて、感覚的につかんでいきました。

濱田／計画系では半世紀の間でどんな変化がありましたか。

若井／昔は学生の数が多かったんですね。1学年350人くらい。あの当時、高度成長期で、建築を学びたいという人が多かったです。製図専用の教室がまだなくて、体育館の1階に広い学生食堂があって、その奥に150台くらいの製図台が並んでいました。とにかく設計製図の提出日がいへんだっただです。350人がひとり10枚ずつの図面をもって来る。積み上げる

と天井に届くほど。それは、今考えると驚異的です。複数の助手が図面を1枚1枚採点したのを記帳する。間違えないように。なんとそれが3日くらいかかるんですよ。製図の先生方は、1枚1枚、ちゃんと見て採点されていた。あの当時だからできたんですね。その後JABBEの審査で多くの建築系学科のある大学に訪問しましたが、1学年のクラスはせいぜい40～50人。国立などはもっと少ない。郡山は、あの時代の人々が各分野に行き、がんばっているんです。そういう卒業生がいるから、今のわれわれがいるんだと思います。

[近年の教育と研究]



45号館3階の作品展示をした廊下



Urabe Tomoyoshi

1969年大阪府生まれ。2000年東京電機大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程修了。博士(工学)。05年より日本大学工学部建築学科。専門は建築計画。著書に、『建築設計のためのプログラム事典-名設計の本質エッセンスを探る』(鹿島出版会)、『ロハス工学』(日経BP社)、『縦ログ構法の世界』など多数。受賞に、パッシブデザインコンペ大賞、木の建築賞、『地形舞台』で東北建築賞作品賞、葛尾村復興交流館「あぜりあ」でグッドデザイン賞など多数。

濱田／若井先生の研究室はコンペに強かったという印象があります。地方で情報を得ることは難しかったと思いますが、どのようにやっていたか。

若井／あの当時、設計コンペというと、日本建築学会の全国共通コンペと、それから建築士会が主催するコンペに応募していました。だいたいいつも、いいところまでいったんですが、最優秀賞はとったことがなくて、いつも2番手くらい。それが悔しくて何度も何度も挑戦をした。なんかしらの賞はもらうので、その経験が積み重なっています。そうして入賞した作品を研究室に飾っておくと、必ず興味をもつ学生がいました。昔は応募も複数人でやりましたから、ひとり寝ていても、必ずだれかは起きてやっていて、そういう設計事務所のような作業をギリギリまでやっていた。そうすると、けっこういい線いくんですよ。そうやって育った人たちは、大手の設計事務所に行ったり、今でも活躍して

いる人がいる。続きは、浦部先生にやっていただいていると思いますが、どうですか。

浦部／昔のようなタイプの学生は減っていると思いますが、今なりにコンペなど他流試合を楽しんでいます。また、45号館の廊下に飾られている歴代の卒業生たちの優秀作品に、刺激を受けているようです。

若井／45号館は、設計製図のための建物です。以前わたしの研究室が16号館にあった時は、その3階に展示スペースをつくっていました。45号館に移ることになって、作品も移したんですね。わたしは、常々作品を常設する展示スペースがほしいと思っていたんです。今回は3階の廊下に飾りましたが、次のステップでは若手の高橋岳志先生にかっこいいギャラリーをつくってもらいたいと思っています。

卒業生の中には、日建学院を創設した故・馬場瑛平八郎氏や、著名な設計事務所「第一工房」の取締役の森戸勝美氏など、活躍する人が数多



実際のコンクリートミキサー車を使って、キャンパス内で行われるコンクリートの実験の様子



広いキャンパス内を、目隠しして白杖を頼りにふたり一組で歩き回り、視覚障がい者の立場に立ってバリアを検証する様子

くいます。森戸さんの奥さまは谷川正己先生の助手をされた方で、いろいろつながりがありました。

濱田／人材というと、建築材料の大濱嘉彦先生、出村克宣先生とふたりの偉大な先生がいますね。その分野の研究を齋藤先生が引き継いでいますが、今はどんな状況ですか。

齋藤／建築材料実験という科目を引き継いでいますが、内容として特徴的なのはコンクリートの実験です。多くの大学でのコンクリートの実験は、実験室で練り混ぜたものを用いますが、工学部では発注した生コンをミキサー車から採取して、フレッシュ時の受け入れ検査、供試体の作製をして、品質が合格かを判定します。その時、生コン工場の技術者がボランティアで実技の指導をしてくれます。地元に着し、広いキャンパスだからこそ可能な内容で、他大学の先生に話すと驚かれ羨ましがられますが、真似されません。研究で材料が他の専門と違うのは、この研究といえどどこも大学が権威というケースが多いですが、退官された先生の研究が継承されず、業界としては頼り先がなくなり、分野が衰退することがあることです。その点、大濱先生、出村先生はコンクリート・ポリマー複合体の第一人者でしたので、多くの卒業生が業界で活躍しており、分野発展のために、業界や学会から期待されていることが多く、微力ながら継承することが重要と認識しています。

濱田／研究の継続性について言う

濱田／工学部の建築教育というと、3つのコース制を長い間とってきました。これは倉田先生の時からと記憶しておりますが。

と、福祉系では佐藤平先生や松井壽則先生、鈴木晃先生がいらっしゃいます。山田先生が専門の福祉系として脈々とつないでおりますが、どういう教育を目指していますか。

山田／私は高齢者や障がいをもつ方の建築環境のことを研究していません。医療や福祉と建築をかけた研究をしているところは全国でも数少なく、先行研究を学生の時にいろいろ調べてみますと、佐藤先生、松井先生、鈴木先生の論文がかなりヒットしました。工学部では、かなり早い段階からこの分野に取り組んでいたんですね。ですから、そういう歴史を引き継いでいるという認識です。授業では、福祉関係の少し難しい話もしますので退屈そうな学生がいますが、車椅子や白杖を使った実験の時はまったく反応が違います。研究室には車椅子4台と白杖が30本ほどあるので、キャンパスの広さ、設備のよさを活かして、障がい者の行動特性と心理的な負担を体験させます。一見するときれいで快適なキャンパスでも、立場が違えばこんな意外な困りごとがあると気づき、学生の目からウロコが落ちるんです。そして、前向きに授業に参加するようになり、各自の設計でも、あらゆる人にやさしいデザインを意識し始めてくれます。

濱田／先ほどは材料実験の話もありましたし、計画の話でも広いキャンパスのなせる技というか、本当に郡山のメリットを活かしている感じがしますね。

倉田／そうなりますね。

濱田／アーキテクト・デザイン・エンジニアという3つのコース。

倉田／元々、構造と材料、計画と環

【コース制の見直しとロハス】

***ロハス工学センタープロジェクト**／下にある「ロハスの家プロジェクト」に代表されるような学部におけるそれまでのロハスやロハス工学に関する学科横断、研究室横断的な研究・活動をまとめる組織として、2020年に「ロハス工学センター」を設立。現在、その中で15以上のプロジェクトが進行している。



上／学内に建てられた「ロハスの家1号」はエネルギー自立が特徴。中／「ロハスの家2号」は、太陽光活用実験用で全面ガラス。回転するのが特徴。下／水と自給循環とパッシブデザインが特徴の「ロハスの家3号」

境の2コースだったのが、計画の方で少し特化したいということで、3つにしました。でも、結局デザインとエンジニアの2つがメインで、アーキテクトは特別なコースのようになっていました。

若井／あの時期、学部全体の特色あるイメージづくりとして、各学科に共通の国際工学技術者資格 (FE、PE) を目指す履修コースが設置されました。同時に日大理工系3学部にある建築の中で、本学科の特色とは一体何なのかについて議論しました。郡山は地方にあって、どこに特色をつくっていったらよいかと。暗中模索でスタートした部分もあります。歴史的には計画・環境、構造・材料と、この2本立てが非常にクリアで、わかりやすい。だから来年度からは結局、原点に戻ることですね。本学科の特色は、各先生の専門を極めることで自ずと生まれてくると考えられます。山田先生の福祉、濱田先生の環境はますます重要になるんじゃないでしょうか。

それから学部のキャッチコピーであるロハスについては、言いにくいのですが、ロハスは抽象的な概念ですから具体性がない。時代が変わっていけば、また、新しいものが求められるような気がします。倉田先生はロハスのことをどう考えていますか。言いたいことあるでしょう。(笑) 倉田／言いたいことは、いっぱいありますよ。(笑) その思想を体現する素質があったかどうか、その思想を貫けるかどうか、非常に難しいところなんですよ。また体現するには

本質的に正直でなくてはならない。学科の教育内容を本質的に変えていかなきゃならない。ある事情から始まったことでしたが、個人的には反対していたんです。今やっている研究をやめなきゃいけない時も来るかもしれない。ほんとにやるの? って。あまりに影響が大きいというのが、私の本音でした。

若井／あの当時、私も本部執行部の一員でしたが、倉田先生は学部の次長として将来構想に苦心していました。私が、執行部の会議でロハスの概念を本学部のイメージ戦略に導入すると聞いた当初は、やや半信半疑でした。それでも現在は、その概念が本学部の対外的なイメージとして定着したようですね。

濱田／浦部先生にもぜひ、ひとこと。浦部／ロハスは、広く解釈できますし、学部の緩い接着剤として機能しているんじゃないかと思っています。建築は、それ自体がロハスに深く関係していると思うので、自分なりに解釈して活動し、ロハスが学部の宣伝になればと、気軽に考えています。不真面目かな(笑)。行き詰まったら、どういうかたちで継続するのか、また他にどんな選択肢があるのか、みんなで議論していく必要があるかもですね。

齋藤／学生に関して言うと、入試の時に、「ロハスを学びたいから選びました」という学生がけっこう多いのも事実なんですね。学生は環境や、健康に興味をもっていますので、それを失わせないように対応することも大事なことだと思います。

濱田／忘れてはならない出来事として東日本大震災と2019年の台風19号の水害が大きいと思います。こう

した予期しない出来事が工学部に与えた影響をどうとらえているのか、教えていただけますか。

3.11 震災と 2019年の水害



2019 年の台風で水没したアムスラー試験機



工学部図書館に所蔵されているレティ・コレクションは、レオナルド・ダ・ヴィンチの手稿、素描、素画や関係文献、資料が数多く含まれている



Saito Toshikatsu
1981年福島県生まれ。2009年日本大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程修了。博士(工学)。08年日本学術振興会特別研究員(DC2)、09年より日本大学工学部建築学科助手、19年から同准教授。専門は建築材料学およびコンクリート工学。著書に『ロハス工学』(日経BP社)など。受賞歴として第27回・第35回コンクリート工学講演会年次論文奨励賞、平成26年度日本コンクリート工学会東北支部奨励賞、平成30年度同論文賞。

倉田/あの地震が起こる前に、福島県沖でけっこう地震があって、エネルギーが放出したのでこれで大丈夫だなと思っていました。たかをくくっていたので、びっくりしました。学部全体が被害を受けましたが、あれだけの大きなものだからしかたがない。台風については、このあたりは水が集まる場所なので、あってもおかしくはないのですが、あれほど大きな水害になるとは想像できませんでした。新しい70号館も高いところにつくったけれど、被害にあった。学生にとっても、先生にとってもたいへんな災害でした。

濱田/学生に怪我がなかったのが幸いでした。

若井/3.11のあの時は3階の研究室にいました。いちばん心配したのは、学生の安否でした。大学院生のひとは最大震度がいちばん大きかった栗原市でしたが、亡くなった人はいないって言ってました。もうひとりの陸前高田出身の大学院生は、連絡がつかないんです。そうしたら、5月になったらひょっこり研究室に現れたんですよ。どうしたの?って聞いたら、あの時は春休みで海外旅行していたと。いや〜もう、うれしいやら、ビックリするやら、それが、いちばん印象的なことでした。もし陸前高田にいたら亡くなっていたかも知れません。さて、2019年の水害では、学内にある大半の建物が1階まで浸水しました。これは、またあるんじゃないかと心配しています。かつて、私が館長をしていた図書館の1階と地階も浸水の被害を受けて、多数の貴重な図書資料が水没して、心が痛むばかりでした。ただ幸いなことに、レティ・コレクションと称するレオナルド・ダ・ヴィンチ関連の蔵書は4階にあったので、

これだけは助かりました。あれだけの蔵書をもっているところはないので、いろいろなところから見せてくださいと、問い合わせがあるんです。ああいう宝は、大事にして、ぜひ活かしてほしいですね。

濱田/山田先生はいかがでしたか。

山田/私は2019年の台風19号の水害が印象に残っています。設備や機器のダメージといったマイナス面もたくさんありました。しかし、提出締切の2日前に完成目前の図面が流されたという学生がいたんですけど、そこで、「心配しなくていいよ」と寄り添って相談にのってあげたり、地元の商店が泥だらけになったところを学生がボランティアできれいにしてあげたりして、地域や学部内での結束というか、一体感が増したというよさもありました。自宅の風呂が使えなくなったので、温泉に行ったらばったり学生と会って、露天風呂で語り合ったりと、今ではいい思い出になっています。

齋藤/私のところは、大震災、台風とすべて被害にあった学内でも珍しい研究室です(笑)。研究室の復旧作業をしながら、クラス担任として学生100人の安否確認のために一人ひとり電話をかけました。

浦部/私の研究室では、3.11後の福島県内の震災復旧とか、復興を通して、地域で学生と一緒に活動していく中で、フィールドワークの回数が結果的に増えて、学生たちが成長する姿が見られました。それから、震災復興における課題は、国内の多くの地域が抱える問題と共通することも多いので、それらに研究者として、大学人として、専門性を活かして、どう取り組んでいくかも、地域に根ざした大学として、重要なテーマを与えられたような気がしています。

「これからの 展望」



地域連携活動の事例 葛尾村復興交流館「あぜりあ」の建築風景(手前・奥)3.11の被災地である葛尾村と包括連携協定を結び、建築も地域貢献のひとつとして、復興交流館に計画段階から開館後の運営まで深く関わっている(浦部研究室)



学科横断プロジェクト事例 Smart Wellness Town PEP MOTOMACHI プロジェクトの菊池医院棟外観。土木が外構、建築がデザイン、機械が環境、電気電子と生命応用化学がヘルスに関して連携して取り組んだロス工学プロジェクトの成果(PJリーダー／浦部)



Yamada Yoshiyuki
1976年新潟県生まれ。2007年3月東京大学大学院建築学専攻博士課程修了。ノルウェー自然科学技術大学(NTNU)留学。博士(工学)、社会福祉士。東洋大学助手、研究員などを経て2018年より日本大学工学部建築学科専任講師。21年日本福祉のまちづくり学会東北支部支部長。利用者にも支援者にもやさしい医療・福祉建築のデザインを建築学と社会福祉学の双方の見聞から研究。

濱田／最後にこれからの工学部の10年ということで、話したいと思っています。今年度からカリキュラムが3コース制から、従来の構造・材料系と計画・環境系の2コース制に変わります。どんな教育、どんな人材を育てていきたいと考えていますか。

浦部／どのコースでもやっぱりひとつは、地域も含めて、工学部らしさをどう伝えられるかでしょうか。一例ですが、地方では身近な木をどう使っていくかということが、大事なテーマになってきています。地域にあった建築を学ぶ、結局、地域に伝えていくということが、特色のひとつにもなりうるし、結果的に広く通用する学びになると考えます。工学部では、コースに関係なく、設計演習で木造住宅の課題を一度は学びます。高橋先生もそうでしたが、地域の非常勤講師の先生方に学内外でご協力いただいています。もちろん学生が細かなところまで理解できなくても、そういった地域の文化や空気に少しずつでも触れることは大事なかなと思います。

もうひとつは、デジタル化が必然である中で、アナログをどう活かすかということですかね。たとえば、個人的な見解ですが、図面のような手描きは、学生のキャラクターを見るのに役立つ、性格がよく出ると思うんですね。学生と戯れる、よく知るツールとして、手描きの表現に代表されるようなアナログ教育などを上手に活かして、工学部らしい学生と教員の関係が築ければいいのではないのでしょうか。

齋藤／就職先を考えますと、施工管理職につく学生が圧倒的に多いわけですから、今は希望者が少な

い構造・材料系のコースを選択する学生が増えてもらいたいと思っています。また、1年生の後期に建築構造・材料概論という科目を新設することになっていますので、少しでも早いうちに、専門がわかった上で自分の興味はどこにあるかを考えて、選択しながら学んでほしいと思っています。

山田／研究室の独自性を出して活動していきたいですね。福祉環境関連の授業は3年生の後期からなので、すでにゼミナール配属がずんでしまっている。次年度から1年生で基礎的な専門科目が増えます。各研究室の得意とする分野を1年生の時から紹介できる時間が増えることで、将来を見据えてこの分野に進もうかと、わくわくしながら進級、学修ができる環境をつくることを期待しています。

濱田／デザインコースとアーキテクトコースとの差が、学生に、明確に説明しづらいということが、これがいちばん大きな問題だったと思います。2つの系にすっきりさせて、それぞれの系の目標をはっきり学生に示すことによって、選択をしてもらって学習の満足度が得られるというふうに変えていきたいですね。それから全国的な問題でもある、地方の私立大学はなかなか受験生が集まらないという状況で、存続するためにはどうしたらいいのでしょうか。

浦部／大学に入ってくる動機もそんなに明確ではない可能性がある。将来を建築や工学と限定しない方が可能性が出てくるかもしれない。建築に入ったけれど、別の分野でも活躍できるといった、可能性も考えなくてはいけないのかなと。そのために、もちろん、



焼杉をつくる風景 近年、木造・木質建築がかなり注目されているが、工学部は地域性もあり、課題や研究などにおいても、長年、建材としての木に親しむ活動が学内外で行われている（速水研究室）

建築に少しでも興味をもってもらおう努力をしつつも、他の分野との関係性にも目を向けるというか、学生に多くの選択肢を示せればと、個人的には思います。

齋藤／新型コロナウイルスを境に、Zoomなどの情報化が進んでいきますので、都心に一局集中でなくても学ぶことが簡単になりました。そういうことで地方でも学べるし、広いキャンパスで学ぶ意味とか、多くの学生が大学の近くに住むという地方ならではの教育や、研究に関しては学科の垣根をなくして連携した研究をやれていることから、学生がいろいろなことに挑戦できるようなことになったら、工学部独自の良さが出るんじゃないでしょうか。

山田／情報技術の進展によって、地方だからというデメリットはなくなってきたと思っています。逆にこのキャンパスは自然が豊かで広大でいろいろな実験ができる魅力があり、ゆとりもあって、研究室の学生と教員が一体となったゼミ活動ができ、かえってよい点もたくさんあると思います。

濱田／私もこのテーマを取り上げた時に、大震災の時のことを思い出しました。あの時、構内で子ども連れの若いお母さんに会ったんです。「恐くてどこに行ったらいいのか、この建物が丈夫そうが入ってもいいですか」と言われたんです。その時は単なる災害の避難場所ではないんですけど、日常的に考えれば、もう一度勉強をしたとか、調べたいことがあるとか、万人の知的好奇心を満たす場所であっていいと思います。

倉田／うちの学部の学生は、本気で建築をやるうって人は少ない気

がする。本当の建築を追求してほしいんですよ。でも、彼らの人生は長い。だから、建築をやれというのではなく、一緒にやりましょうと。ものごとは一所懸命にやらないと、興味なんかもてないもの。なんについてもそうなんですけど、人生の7割は苦なんですけど、3割が魅力で喜びなんです。これをどこかで学生に伝えてあげる。うちの学部に来てよかった、学生の未来を拓くような時間を過ごし、人としての喜びを感じて卒業させてやりたい。素養を積む。押しつけるのではなく、経験を積めるような環境をつくってあげることが、今の若い人にとっては大事なんだと思います。

若井／今日久しぶりにみなさんにお会いしました。現役の浦部先生、齋藤先生、山田先生ががんばっていることを知り、うれしく感じました。ぜひ、その姿勢を続けてください。工学部は共に学び、遊ぶという、家族大学の伝統が続いていることを再認識しました。今後、ロハスの続きがどう進展するのか、期待しております。

濱田／キャンパスの景色は時間の流れとともにどんどん変わりますが、変わってはいけないのは学生と教員がともに成長すること。つまり「家族大学」が工学部建築学科であると思いました。今日は素敵なことばに出会うことができました。懐かしい先生方のお名前がたくさん出てきました。ご紹介できなかった先輩の先生も多かったです。その先輩方の思いもしっかり受け継ぎたいと改めて思いました。長時間にわたりお話しいただき、ありがとうございます。

*家族大学／キャンパスを学修する場としてとらえるだけでなく、学生と教職員が家族のように多面的にコミュニケーションをとり、また互いに助け合って、各人が自分に合った成長ができる場としよう」ということで、いつしか工学部建築学科の目指す方向性のひとつとして緩やかに定着したことは。